

〈鶴岡工業高等専門学校&高専技術振興会タイアップ企画〉

新春座談会

2026

# 地元で働き、暮らすという選択 Uターンした若い世代のリアル ～鶴岡高専卒業生の場合～

全国的に地方都市では、少子化の進行に伴う人口規模の縮小、若い世代の地元離れが地域課題となっている。進学や就職で地元を離れて暮らす若者が増加している現状はあるものの、中には、郷里への愛着や帰郷意識を持ってUターンし、培った職能や経験を生かして活躍している人も多い。2026年の座談会では、鶴岡工業高等専門学校の卒業生で地元就職やUターンを選んだ方々を招き、職業選択や就職活動の体験、地元帰郷の経緯、郷里での暮らしの魅力などを語り合っていた。出席者は、機械工学科（現・機械コース）卒の石井智久さん（石井製作所代表取締役、制御情報工学科（現・情報コース）卒の原田あすかさん（鶴岡高砂製作所、物質工学科（現・化学・生物コース）卒の佐々木伸啓さん（ツエルメクテス、電気電子工学科（現・電気・電子コース）卒の佐藤智也さん（鶴岡高専助教、鶴岡高専創造工学科教授で地域連携センター長の斎藤菜摘さん（順不同）。前半の話題は、鶴岡高専を選んだきっかけと学び、就職活動の体験など。

## 農機開発と事業支援に注力



いしい ともき  
石井 智久 さん

1988年酒田市生まれ。2009年に鶴岡高専機械工学科（現・機械コース）を卒業。11年に長岡技術科学大学環境システム工学科を卒業。13年に同大環境システム工学科の修士課程を修了。同年、農業機械の開発販売を手掛ける家業・石井製作所に入社。15年6月から代表取締役

―それぞれ自己紹介をお願いします―

石井 私は酒田市の新堀というところに生まれました。鶴岡高専では、機械の設計や工学を学び、流体力学を研究しました。長岡技術科学大学・大学院では環境システムを専攻。農家さんたちと一緒に農業分野で技術研究を4年間させていただきました。石井製作所は農業機械のメーカー

―で、僕は4代目の跡取り。代表なので経営がメインですね。農業系のいわゆる商用化技術というところで、新しい直蒔きや密苗といった技術を開発したり、地元の企業さんと連携して農機を作ったり。最近は農林水産省のスタートアップメンターという仕事もしており、地域内外で農業系ベンチャーの立ち上げや事業と再生の支援に、自分の事業と

並行して取り組んでいます。

佐々木 私は、医薬品や医療機器の製造販売をしている日東電工の東北事業所に就職。品質保証の部門で働いて、4年ほど前に実家に戻ってきました。今まで培ってきた経験を生かし、ツエルメクテスに在籍。品質保証関連の業務を担っています。ツエルメクテスは、大豆や小麦粉などを代替する食品原料として納豆菌から作ったタンパク質や加工食品を開発生産しているスタートアップ企業です。パン、クッキー、麺などがあり、小麦粉の一部を代替するパターンもありますし、100%を代替するものもあります。大阪万博にも参加しまし

## 鶴岡工業高等専門学校

1963年に創立された国立の高等教育機関。確かな技能を求められる工業系技術者、高度化・ハイテク化していく科学系分野で活躍できる人材を養成し、地域内外に輩出している。基礎と専門的な実践技術を身に付ける5年間の本科、発展的に学んで大学修了と同レベルの技術者教育を受ける2年間の専攻科を開設。本科では、1年次は創造工学科に所属し、2年次に機械、電気・電子、情報、化学・生物の4コースから選択して学ぶ（2017年度に機械工学科、電気電子工学科、制御情報工学科、物質工学科より改組）。25年度には新たにデジタルデザインコースが開設された。専攻科には機械・制御、電気電子・情報、応用化学の3コースを設けている



ささき のぶひろ  
佐々木 伸啓 さん

1995年鶴岡市生まれ。2016年に鶴岡高専物質工学科(現・生物・化学コース)を卒業。18年に同専攻科の応用化学コースを修了。同年に日東電工株式会社に入社し品質保証部門に配属。22年にフェルメックス株式会社に入社し生産管理や品質保証の体制構築に携わっている

## 納豆菌粉で食糧課題に挑む

鶴岡高砂製作所は、電気自動車などの開発段階で使われる試験・評価用電源装置を手がけています。電気自動車を取り巻く環境は変化が大きく、将来の方向性が注目されている分野です。当社はその中で実用化に欠かせない検証やテストを支える立場として関わり、安全性や性能を確認

て、弊社で作ったフィナンシェという焼き菓子をサンプル提供。アレルギーのある方への対応の可能性という部分でも好評をいただきました。

原田 私は本科を2018年に卒業して本田技研工業株式会社に入社しました。配属は静岡県の浜松。生産管理の部門で4年半ほど働き、結婚を機に退職しました。以前から関東での生活を経験してみたいという思いがあり、半年ほど東京で生活したのち、鶴岡に戻りました。昨年10月に鶴岡高砂製作所に入社し、現在に至ります。

する重要な工程を担っています。Hondaで身に付けた生産管理の考え方を、現在の職場での業務に合わせて生かしながら働いています。

佐藤 電気電子工学科に2009年に入学し、専攻科では燃料電池の作動温度の低温化に向けた研究を行いました。東京工業大学(現・東京科学大学)に進学し、圧電体材料の結晶構造解析をテーマに研究。その後、就活を経てJR東日本の総合職として入社しました。今年4月から母校である鶴岡高専の教員として働いています。新卒採用や若手育成を担当する部署での経験は、教育という面で今につながっていると思います。

斎藤 私は出身が群馬県です。大学の薬学部を卒業し、薬剤師の資格を取得。就職氷河期の中で就活に苦戦していたところ、大学で所属していた研究室で助手として働くチャンスを得ました。大学院に

## 自動車産業に関わりたい



はらだ あすか  
原田 あすか さん

1998年酒田市生まれ。2018年に鶴岡高専制御情報工学科(現・情報コース)を卒業。同年～22年まで本田技研工業株式会社に在籍し生産管理業務。24年に鶴岡高砂製作所に入社し、生産管理部に配属

進学、在籍しながらつくば市の食品総合研究所で支援研究員として研究をして博士の学位を取得。その後、慶應義塾大学先端生命科学研究所の特任教員として鶴岡に赴任し、10年間研究と教育に携わりました。そこでいろいろな人とつながり、鶴岡高専に来ることができて現在に至ります。

私の研究の専門は微生物です。環境微生物を分離する技術や、それを利用する技術を学生と一緒に作ろうとしています。見つけた微生物を農業や食品などの産業分野に利用できるようにしたいので、企業や大学と共同研究しながら社会実装を目指しています。

— 鶴岡高専を選んだきっかけや理由を教えてください

佐々木 私の場合は中学3年生の時、高校の説明会で初めて知りました。話を聞くと理系に関するところを深く学べるということで、自分の中では理科系が好きな分野で、

反対に文系は苦手だったので候補に挙がりました。

佐藤 私もです。歴史などの文系科目には苦手意識がありましたが、理系科目は興味を持って学んでいました。親が電気関係の仕事をしているというところもあり、高専を選択しました。

原田 私は入学してから特殊なタイプだったと気付いたんですけれども。中学の時から自動車業界で自動運転などの研究開発をしたいという気持ちがありました。それに一番近いのはどこなんだろうなと思った時に、普通高校よりは高専に行つて就職という道の方がいいのかなと考えました。実際に近道だったかどうかはさておき、それが一番最初のきっかけでした。あと、寮があったこと。私も酒田出身なもので、寮生活ができるのがかなり魅力的でした。さらに言えば、女子の制服がかわいいと感じましたね。



# 総合職経験生かし教職へ



さとう ともや  
**佐藤 智也** さん

1994年鶴岡市生まれ。2014年に鶴岡高専電気電子工学科(現・電気・電子コース)を卒業。16年に専攻科の同機械電気システム工学コースを修了。18年東京工業大学(現・東京科学大学)物質理工学学院材料系を修了。同年に東日本旅客鉄道株式会社に入社。秋田車両センター、奥羽本線・田沢湖線の車掌、若手社員の育成などを担当。25年に鶴岡高専創造工学科の電気・電子コース助教に着任

石井 寮の存在は私にとっても大きかったですね。小さい頃から「石井製作所の跡継ぎ」という看板を背負っていて、そういう見られ方や扱いを感じてきたことで、自分自身の価値がよく分からずにいました。あと、中学の時に人間関係で悩んだこともあって、そこで周りの友達が行かない学校を選びたい、親元を離れたい、と。自分の力で生きるというか、周りを気にせずにトライできる環境だと思ったのが高専だったんです。

斎藤 高専と、高校や大学とはどんな違いを感じましたか？

石井 進学校と比べた場合、大学受験やセンター試験、今は共通テストですが、それがなくて。もちろん何かに追われるから頑張れるっていうところもありますけれどもそれ以上に、5年間で腰を据えて何か興味のあることに取り組めるっていうのは良かったと思いますね。大学受験

はないけど、専攻科があって、行きたい人は他大学や大学院に編入学もできるのは強みだと思います。

原田 大学受験のためだけに知識を蓄えるのではなく、いろんな実験や経験ができる自由さでしょうか。もちろん授業のレポートや提出物は常にあるんですけども、日常的に何か楽しめる環境があるのがすごくいいところだったかな。私は学生会に入って他の高専と交流したりもしました。東北の各高専出身の友人がいて、今でも集まったりつながりが続いています。

佐々木 他の高校の友達からよく聞くのは設備のことで。実際に社会で使う機材や機器があつて、触れる機会が多いのは、他と違うのかなと感じます。私は前職で業務に入る時に、設備機器に関する基本的な知識があると、業務の理解の速さや進め方がだいぶ違うことを実感しました。

斎藤 たしかに。高専の教

員は研究者でもあるので、大型の外部研究資金を獲得して設置した特殊な専門的機器があります。これは高校と大きく違うところ。学生が卒業研究で受託研究に参画したり、地域課題をテーマとした研究を通じて地域と関わることも高専の特徴だと思います。

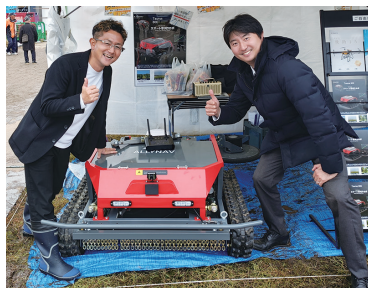
原田 私は専攻科には進んでいないのでそんなに深い研究はしてないんですが、それでも研究室に一年半いて卒業研究を発表したっていうところ、何か一つのことを成し遂げられたというのが大きいです。高専卒は就職時に、大学の学部卒と同様の業務に配属されることが多く、実践的な専門教育を生かして周囲と同じ目線で仕事に向き合っていました。理系分野を中心に学びましたが、生産管理では、文・理それぞれの強みを生かせる業務に携わっています。

斎藤 高専では、4年生の後期から研究活動が始まります。大学1年生と同等の年代になります。研究活動の中では自分で考えなければならず、データ整理やプレゼンテーションの機会も多くなりま

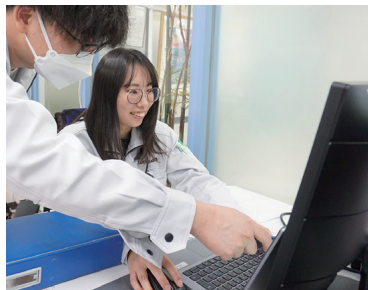
めることが学生の成長を促していると感じます。

——高専は高い就職・進学率、安定した進路に定評があります。職業選択、就職活動の体験を聞かせてください

佐藤 私は、高専の頃から就職はほとんど考えていなくて。高専は就職に強いというイメージを持たれますが、同時に高い専門性や幅広い経験を得ることができたため、進学にも有利だと感じていました。特に専攻科まで進むと、研究レベルや業績を含めて大学生以上となることから、3年生の時には視野に入っていなかった大学への進学を目指せるようになりました。そこは高専時代に研究・勉学ともにコツコツと積み上げてきて良かったなと感じました。就活では、軸を何にするか悩みましたが、どちらかというと任せられた仕事をしっかりと責任感を持ってやるっていうタイプ。そういう意味ではインフラ系の仕事は自分に合うんじゃないかと思う、鉄道・航空・電力系、インフラ設備に関わる電機メーカーなどを中心にエントリーしました。その中でどの企業に就職すべきか本当に悩みましたが、小さい頃から電車は好きでしたし、経営的視点を身に付け、



農機展示会にて。秋田で海外農機を扱う商社の担当者と共に



普段はデスクワークが中心。でも現場で何かあればいつでも駆けつけます

納豆菌粉末の委託生産にあたり海外への出張もある。任ざれて企業訪問した時には責任の重大さを感じる



会社とともに私自身も成長できるフィールドが整っていると感じたことから最終的にJR東日本に決めました。

佐々木 私は、求人票で興味があるところを片っ端から集めて、あまり地元から遠く離れたくないなと思いながらみていました。学んできたことを生かせる仕事、生物学寄りの物質工学に何かの形で関われる企業がいいなと、ふわつとした感覚で探しました。

斎藤 指導教員だった立場から申し上げると、佐々木さんは就職活動に割と苦労していました。というのも専攻科には、ものすごくたくさんの方を求めているというんです。昨年だと726社からいた。去年、求人倍率は52倍でした。自分がどういう仕事をしたいのか、「絶対ここがいい」という信念のようなものがないと、求人の中からどうやって、何を決め手に選んだ

らいいのか分からなくなってしまうのです。

石井 私の場合、家業を継ぐということは自覚していました。なので高専を通じて、職人として生きることができるようになったと自信ができました。工場の機械を全部使えたり図面を描けたり。大学と大学院では、農業と経営の勉強をしながら事業化をいろいろ実践しましたね。大学寮の中で家電修理を請け負った

ら、部品の調達が大変で儲からないとか、自動車が欲しい留学生たちに通訳しながら購入を仲介してみたり。何を言いたいかというと、問題解決

## 高専の学びは課題解決力育む



さいとう なつみ  
斎藤 菜摘 さん

群馬県出身。1996年に東邦大学薬学部薬学科を卒業。2003年に同大学院薬学研究科博士課程を修了。同年に慶應義塾大学・先端生命科学研究所特任教員。13年に鶴岡高専物質工学科准教授。24年に同創造工学科教授。25年から副校長、地域連携センター長。研究テーマは環境の未培養微生物の探索、食品主原料として利用可能な「納豆菌粉」の開発

能力が身に付いたということ。普通だったらできないとか、やめようかと諦めちゃうところを、高専生はアイデアと技術でどうやったらできるかと考えられる。この思考は経営者としてめちゃめちゃ生かされていると感じます。

斎藤 概してそういう学生が多い気がしますね。鶴岡高専には学生が育つ環境がある。それぞれの専門の研究やコンテストなどで、装置や材料を作ったり分析したり、手を動かしながら考える場面が多い。そんな環境で鍛えられるので、直面した課題を解決しようという力が養われるの

だと思っています。

原田 就職の時期に張り出された求人票に私が入りたい会社はありませんでした。きつと高専には求人がない分野や業種、職種があります。

そこで私は研究室の先生に「この会社に入りたいんです

が、どうしたらいいですか？」と尋ねました。そうしたら求人出してもらえように掛け合ってくれて。それで無事に応募できたんです。先生の協力はかなり重要かと。

高専は就職率100%と言われており、実際に求人も多く寄せられます。卒業までに全員が内定を得られるという意味では心強い環境ですが、必ずしも第一志望の内定が100%というわけではありません。希望どおりの進路を実現するためには、学校推薦があるからと安心しすぎず、自分自身でしっかり準備することも大切です。学校推薦の1社の選考が長かったりしてもし落ちてしまったら、2社目を探す時には数が減っているでしょう。私も選考結果が出るのが遅かったんで、落ちてたらどうしようって不安に思いながら待つてましたね。

「次号につづく」



新春座談会  
2026

# 地元で働き、暮らすという選択 Uターンした若い世代のリアル

## ～鶴岡高専卒業生の場合～（下）

工学系高等教育機関・鶴岡工業高等専門学校の卒業生で地元就職やUターンを選んだ方々を招き、仕事と暮らしについて語り合う2026年の新春座談会。前回に続き、意見交換の様子を誌面で紹介する。出席者は、機械工学科（現・機械コース）卒の石井智久さん（石井製作所代表取締役）、制御情報工学科（現・情報コース）卒の原田あすかさん（鶴岡高砂製作所）、物質工学科（現・化学・生物コース）卒の佐々木伸啓さん（フェルメクトス）、電気電子工学科（現・電気・電子コース）卒の佐藤智也さん（鶴岡高専助教）、鶴岡高専創造工学科教授で地域連携センター長の斎藤菜摘さん（順不同）。後半の話題は、Uターンの経緯、地元への意識、今後のビジョンなど。

### 新規事業の創出に挑戦を



いしい ともき  
石井 智久 さん

1988年酒田市生まれ。2009年に鶴岡高専機械工学科（現・機械コース）を卒業。11年に長岡技術科学大学環境システム工学科を卒業。13年に同大環境システム工学科の修士課程を修了。同年、農業機械の開発販売を手掛ける家業・石井製作所に入社。15年6月から代表取締役

―地域連携センターについて紹介をお願いします―

斎藤 鶴岡高専の地域連携センターでは、本校の研究シーズを生かした研究協力や技術支援、技術相談、科学技術教育の推進に取り組んでいます。地元企業や自治体、地域の団体などと協力したさまざまな活動を通じて、鶴岡高専がこの地域をより良くすることに貢献する場をつくるのが地域連携センターの役割です。

この立場になって気付いたことは、本校の学生が地域の特徴、例えば文化でも産業でも住んでいる地域を自慢するネタをあまり知らないということです。知らないというよ

りは「すごい」ということを意識していないのだと思います。

鶴岡は、食文化や新しい産業が集積しているという側面でも全国的にも特徴的で卓越した地域です。こういったことをどんどん発信し、鶴岡高専の若い学生にこの地域への愛着とプライドの醸成を促すことは、地域人材の循環を促すためにすごく重要だと思います。

―鶴岡高専の就職、進学状況を教えてください―

斎藤 鶴岡高専の本科5年生の進路では、就職が全体の6〜7割、専攻科や大学への進学が3〜4割となっています。卒業後に県外企業に就職する学生が多く、昨年度で

すと県内就職は2割程度でした。ですが、今回お話いただいている卒業生のように、県外でたくさん経験を積んで戻ってきてくれる人材がいまいます。大企業での仕事経験、地元から外に出て生活した経験を通じて、いろいろな物の考え方や見え方が変わってくるのではないかと思います。

鶴岡高専には庄内地域外や県外からの学生も多くいて、彼らが卒業後に鶴岡、庄内に就職するUターン人材も増えてきています。地元以外のことを知り、戻ってきてあらためて鶴岡の良さや課題をどう感じるのか、ぜひ皆さんに聞いてみたいですね。

―では、Uターンの経緯、地元への意識についてうかがいましょう―

佐々木 私の実家は農業を営んでいます。前職の頃も不定期で戻って手伝いをしていました。4年ほど前に身内の体調が悪いという連絡を受けて、もっと頻繁に手伝って



ささき のぶひろ  
佐々木 伸啓 さん

1995年鶴岡市生まれ。2016年に鶴岡高専物質工学科(現・生物・化学コース)を卒業。18年に同専攻科の応用化学コースを修了。同年に日東電工株式会社に入社し品質保証部門に配属。22年にフェルメクテス株式会社に入社し生産管理や品質保証の体制構築に携わっている

## 学びと経験は若いうちに

石井 私は事業承継という  
どうしても街の規模は小さいですから職種は限られるかな、給料も変わるかなと心配はありました。とはいえ馴染みがある環境ですし、身内も近くにいますし。どうにかなるだろうと考えました。

ことになりましたが、迷いしかありませんでした。父親の体調不良や弱ってきた様子を見て、心の準備はなんとなくしてたんですけども。父親が亡くなつて脇で泣いている祖母を見た時に、自分が戻らないと家がダメになるなと思って断ったと思います。

原田 私は、地元就職をしていた交際相手と話し合い鶴岡に戻ることを決めました。就職活動の時点では地元に戻ることは考えていませんでしたが、人生設計を考える中で、生活環境や家族との距離を含めて検討し、将来について自分なりに折り合いをつけることができました。振り返ってみると、一度地元を離れ、5年ほどで帰ってきたことは私にとつてとても良い選択でした。

帰ってきた結果、やはり住み心地が良いです。10代の頃はあまりにも地元のことが見えていなかったな、と。車でどこへでも行けるし、お酒や旅行や舞台観劇なので、今でも頻繁に東京へ行き、エンタメは県外で楽しめていることも、地元暮らしに満足している理由の一つかもしれません。そうした今の暮らしを楽しみながらも、20代後半になり、家庭を取り巻く状況が変わる中で、地元の暮らしやすさや両親が近くにいることのありがたさを強く感じています。これから考えると、家族が身近にいる環境は大きな支えだと感じます。

私は志望した会社に入社してきましたが、配属先は思い描いていたものとは異なりまして。日本の就職あるあるではあると思います。働くうえで「どこで暮らすか」はとても大切で、自分で選んだ場所であれば前向きに向き合えますが、そうでなければ慣れ親しんだ地元の方が良いと考える

また、私は退職後次のステップに進むまでの間に半年ほど東京で自分の時間を持つことができました。転職したからこそ、人生の夏休みのような期間を生み出すことができ、本当に私にとつて良い時間でした。都会は遊びに行く場所だということに思い至りましたし、人生働き通しではなく、一度休憩を挟むのもありだと感じました。学生の時はいつさい考えなかった選択でした。

一方で、周囲を見渡すと、Uターンしたくても簡単には決断できない人が多いと感じます。給与や働き方の条件に差があると、地元に戻る選択はどうしても難しくなります。実際、高専時代の同級生にも、県外で働きながら「いずれは地元に戻りたい」と話す人は少なくありません。都市部との条件面のギャップが縮まればUターンは活性化す

## 培ったスキル生かし貢献



はらだ あすか  
原田 あすか さん

1998年酒田市生まれ。2018年に鶴岡高専制御情報工学科(現・情報コース)を卒業。同年～22年まで本田技研工業株式会社に在籍し生産管理業務。24年に鶴岡高砂製作所に入社し、生産管理部に配属

ようになりました。

また、私は退職後次のステップに進むまでの間に半年ほど東京で自分の時間を持つことができました。転職したからこそ、人生の夏休みのような期間を生み出すことができ、本当に私にとつて良い時間でした。都会は遊びに行く場所だということに思い至りましたし、人生働き通しではなく、一度休憩を挟むのもありだと感じました。学生の時はいつさい考えなかった選択でした。

一方で、周囲を見渡すと、Uターンしたくても簡単には決断できない人が多いと感じます。給与や働き方の条件に差があると、地元に戻る選択はどうしても難しくなります。実際、高専時代の同級生にも、県外で働きながら「いずれは地元に戻りたい」と話す人は少なくありません。都市部との条件面のギャップが縮まればUターンは活性化す



## 人間力ある技術者を育成



さとう ともや  
佐藤 智也 さん

1994年鶴岡市生まれ。2014年に鶴岡高専電気電子工学科(現・電気・電子コース)を卒業。16年に専攻科の同機械電気システム工学コースを修了。18年東京工業大学(現・東京科学大学)物質理工学院材料系を修了。同年に東日本旅客鉄道株式会社に入社。秋田車両センター、奥羽本線・田沢湖線の車掌、若手社員の育成などを担当。25年に鶴岡高専創造工学科の電気・電子コース助教に着任

るのではないでしょうか。

佐藤 20代前半の頃には「地元で就職する」「地元に戻る」というのはほとんど意識していなかった、というのが正直なところです。総合職である以上、基本的に2、3年で転勤があり、転勤先や職責によっては高い頻度で帰ってくることもできない。その中で親のサポートや自分の生活、ライフプランなどを考えるとUターンという選択肢が現実味を帯びてきました。

一方で、いざ鶴岡高専に戻るとなった時には不安はありました。教員になれば講義や研究活動もあるので、本当に今の自分にできるのか?とも悩みました。ただ、知っている先生方も多いですし、母校でもあるので思い切って飛び込んでみようと思ひました。

― 地元に住み、働くという部分の実感はいかがですか

佐々木 冬の雪ですね。

私が住んでいた宮城でも降る

時は降るのですが、交通の不便は実感しますね。実家のある櫛引地域はかなり積もりまです。車を出す時にはシャベルで雪かきをひと通りやらないといけません。

佐藤 冬はやはり東京や仙台の方が過ごしやすいですね。晴れも多いです。ただ、人混みの中で生活している圧迫感がなくなつて、ストレスは減つたと思います。平日は満員電車で通勤し、休日に車で出かけようとしても基本渋滞。田舎たつたら数分で行ける距離なのに、東京ではどれだけかかるの? という具合。鶴岡に帰ってくれば緑もあるし、海もあるし、気持ちよく車で走れるし。鶴岡で

の日常が都会では当たり前でなく、仕事に注力するために生活する環境は重要だったんだな、とあらためて気付きました。

原田 冬の話が出ましたけど、最近の関東を見てると夏は暑すぎて住みにくそうです。庄内の夏も暑いですが、電車通勤がない分、暮らしやすいかもしれないですね。

佐々木 私の場合、地元には不便はあまり感じませんね。その場にあることである程度満足できてしまふんです。本当に暇だつてなつたら休みを取つて旅行に行つたりしますし。遊びとか楽しいことは、探せばあると思います。自分が今までやつてこなかったこと、他の人がやつてる面白そうなことなどの中から、石井 経営者の目線でみた時、関東圏に行かないと手に入らないものというところ、それは圧倒的に人脈と情報です。仕事をする上で東京事務所を構えようかなと思つづらいます。

## 地域への愛着と誇りを育む



さいとう なつみ  
斎藤 菜摘 さん

群馬県出身。1996年に東邦大学薬学部薬学科を卒業。2003年に同大学院薬学研究科博士課程を修了。同年に慶應義塾大学・先端生命科学研究所特任教員。13年に鶴岡高専物質工学科准教授。24年に同創造工学科教授。25年から副校長、地域連携センター長。研究テーマは環境の未培養微生物の探索、食品主原料として利用可能な「納豆菌粉」の開発

これはぬぐえない差だと思います。ただ、地元の何がいいかというところ、やはり人柄でしょう。地域の柄や肌感の合う合わないは、人それぞれあるでしょう。どこに行つてもその地域独特の癖みたいなものがある。庄内だつたらちよつとスローな空気感みたいな。私はそこにすぐ落ち着く感覚があります。

私は20代から30代前半ぐらいまでアウトドア、インドア問わず、いろいろな遊びを楽しんできましたが、子どもが生まれたということもあり、楽しみ方が変わつてきました。自分の人生をどう楽しむかということと共に、子どもたちの幸せをどのように作っていくかとか考えるようになりました。そうなるって地元や地方というのは意外に良いと思つています。

― 地元暮らし、今の仕事を通じてこれからどのようなビジョンを持っていますか

原田 今の仕事では、自分が培つてきたITスキルや生産管理の経験を生かして職場の効率化に貢献し、より良くしていきたいと考えています。目の前にあるやるべきことや仕事に対し、与えてくれた人が満足できる成果を出せる人材になれるよう、一歩一

## 鶴岡高専Uターンサイト

鶴岡高専卒業生・修了生の地元での再就職をサポートし、地元のものづくり企業の中途採用活動を支援するサイト。



鶴岡高専の研究開発力の向上と、地元のものづくり企業との連携をバックアップしている鶴岡高専技術振興会(会員企業190社)が2024年度から運営している。

鶴岡高専 OB・OGと同会会員企業がユーザー登録することができ、企業求人と求職者情報の閲覧、検索が可能。

スカウト機能を活用することで、自身を求職者リストに表示させてアピールできるほか、企業側からチャットで直接コンタクトを取ることもできる。



サイトの二次元コード▶

歩取り組んでいきたいと思ひます。

佐藤 私は鶴岡高専の教員として、世界に通用する技術者を育成すること、人間力をしっかりと身に付けてもらうというところをがんばりたいと思っています。前職で採用や若手の育成に携わっていた際に、新卒採用者や学生の特徴が、これまでとは少し異なってきた感じがありました。どれだけ高い技術力があったても、互いに協力し合い信頼を築こうとする姿勢がなければ、真に社会で活躍することはできません。そのためにも、私は技術力のほか人間力も在学中に高めることが社会人としての可能性をさらに切り拓くことにつながり、振

り返った際に「鶴岡高専で良かった」と思ってもらえるよう、研究・教育活動に取り組んでいきます。

佐々木 今勤めているフェルメクテスはスタートアップの企業で、けっこう少数精鋭な部分があつて。いろいろな業務を兼任している部分があり、人材を求めています。社会経験があつたり、技能や技術を持っている人がUターンやIターンの形で入ってくれるとありがたいですし、関心のある方がいれば積極的に触れ合える機会を持ちたいです。自身では会社の発展にいつそう貢献したいと思ひます。これから進学、就職する方々には、若いうちにより多くのことを学び、経験し、吸



母校の教壇に立つ佐藤さん  
前職での若手育成の経験も生きている

収し、自分の成長につなげてもらいたいですね。

石井 自分が学んできたことで、やってきたことがどこでどんな形で生きてくるのかは分かりませんからね。あの時は全然意識していなかったけれども、今思うとやっておいで良かった、ということがあります。年齢を重ねた今になると感じます。

私のこれからの展望について。まず会社としては、これから社員の待遇改善を進めたい。従業員のみんなには苦勞をかけたんですよ。父が亡くなり、工場が火災になって。立て直したと思つたらコロナ禍。米価が下がって離農が増える事態になったと思つたら昨年は高騰しました。当社の農機関連事業としては利益を出せる態勢に持ってこれているので、いよいよ従業員に還



秋田の釣り堀にて息子と初めての釣り。  
この日は8匹も釣れました

元していく。さらに、関東圏に引けを取らない人材に育てていきたいと考えています。私自身としてはこれまで、事業再生、既存の業務や仕事の効率化と収益化に特化してきたので、これからの5年は新規事業の創出にトライしてみたいですね。農業やものづくりの分野で地域の課題解決に取り組みながら、地元から発信できる新しい価値を作っていきたい。思い立ったら何か会社や組織を作つて動く、そんな経営者になりたい。地域を良くしなきゃという義務感だけではない。好きなことを自由にやりながら、結果的にそれが何か地域の役に立っていた、誰かの幸せにつながったという感じの生き方をしたい。という夢を描いています。

(おわり)